

青森県埋蔵文化財調査報告書 第254集

# 戸沢遺跡

—県営高野川地区農免農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第254集

# 戸 沢 遺 跡

—県営高野川地区農免農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会



## 序

下北半島には、縄文時代から中世にわたる多くの遺跡が確認されております。

青森県教育委員会では、県営高野川地区農免農道建設事業に伴う川内町戸沢遺跡の発掘調査を行い、本書はその結果をまとめたものです。

今回の調査によって、縄文時代早期・前期・中期・後期、弥生時代、中世といった多時期にわたる遺構・遺物が見つかりました。

これらの成果が、今後埋蔵文化財の保護と活用に役立つところがあれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、青森県農林部、川内町教育委員会並びに御指導・御協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

1999年3月

青森県教育委員会

教育長 松森 永祐



## 例　　言

- 1 本報告書は、平成9年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した県営高野川地区農免農道建設事業に伴う川内町戸沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は赤羽真由美と協議の上、神康夫が執筆・作成・編集した。
- 3 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「むつ」である。
- 4 採図の縮尺は各図ごとにスケールを付してある。写真の縮尺は不統一である。
- 5 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準に拠った。
  - (1) 図中の方位は磁北である。
  - (2) 遺構断面中にある土層断面図及び横断図には、"ー"の横に標高を付してある。
  - (3) 土層の注記は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1996)を用いた。
  - (4) 遺物には観察表・計測値を付し、出土地点、法量及び諸特徴を一覧できるようにした。石器計測値は全て現存値を示している。
  - (5) 図中で使用したスクリーントーンは下図のとおりである。

<遺構>



焼土

炭化物

石器スリ

石器タタキ

<遺物>



- 6 資料の鑑定や試料の同定、分析については次の方に委託した。

石器の石質鑑定	松山 力 (八戸市文化財審議委員)
放射性炭素年代測定	木越 邦彦 (学習院大学教授)
- 7 引用・参考文献については巻末に収めた。
- 8 出土遺物、実測図、写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。  
なお、整理段階において調査区のグリッドがずれていたことが判明し、本報告書に記載している調査地点と、遺物に注記している調査地点と異なっている場合がある。本報告書に記載してある調査地点が正しく、照合する際は整理番号をもとに照合して頂きたい。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたり、次の諸氏並びに各機関からご教示、ご指導をいただいた。  
感謝いたします。(順不同、敬称略)  
蝦名 純、大島義弘、葛西 効、菊池充三、児玉大成、千葉周二、寺田徳穂、長尾正義  
福田正宏、松本七英



# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 調査要項、調査方法、調査の経過、遺跡周辺の地形と基本層序	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査方法	4
第3節 調査の経過	4
第4節 遺跡周辺の地形と基本層序	5
第Ⅱ章 検出遺構と出土遺物	7
第1節 土坑	7
第2節 焼土遺構（放射性炭素年代測定結果）	9
第3節 遺構外の出土遺物	14
第Ⅲ章 まとめ	26
参考文献	26
写真図版	27
報告書抄録	34



# 第1章 調査要項、調査方法、調査の経過、遺跡周辺の地形と基本層序

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

県営高野川地区農免農道建設事業に先立ち、当該地区に所在する川内町戸沢遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間 平成9年4月22日から同年6月12日まで

(当初4月22日から7月1日まで)

### 3 遺跡名及び所在地 川内町戸沢遺跡（青森県遺跡台帳番号 51030）

下北郡川内町大字川内字戸沢46、外

### 4 調査対象面積 4,600平方メートル

### 5 調査委託者 青森県農林部

### 6 調査受託者 青森県教育委員会

### 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関 川内町教育委員会 下北教育事務所

### 9 調査参加者

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 富岡 潔 川内町教育委員会教育長

調査員 高橋 潤 私立青森山田高等学校教諭（考古学）

奈良 正義 元県立田名部高等学校校長（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

総括主幹・調査第二課長 鈴木 克彦（現、県立郷土館学芸主幹）

主 事 神 康 夫（現、文化財保護主事）

主 事 赤羽 真由美（現、文化財保護主事）

調査補助員 盛田 英人、田中 美鈴（平成10年12月退職）

三上 静香（平成10年3月退職）、小島 由記子

## 第2節 調査方法

### [グリッド・ベンチマークの設定]

調査区内にある工事用センター杭のNo297とNo298を結ぶラインを設定し、それぞれの杭を基準として4m方眼のグリッドを組んだ。南北方向は南へ増えるアルファベットで、東西方向は東へ増える算用数字で示した。グリッド名は、北西の杭番号のもっている、アルファベットと算用数字の組み合わせによって呼称した。No297はF-35、No298はF-40とした。算用数字のライン（南北ライン）は、磁北から26°西へずれている。

ベンチマークは調査区付近にある工事用のベンチマークを用い、調査区内に適宜移設し使用した。

調査前の標高は、台地上の平坦面で12~13m、西端では標高4mとなっている。



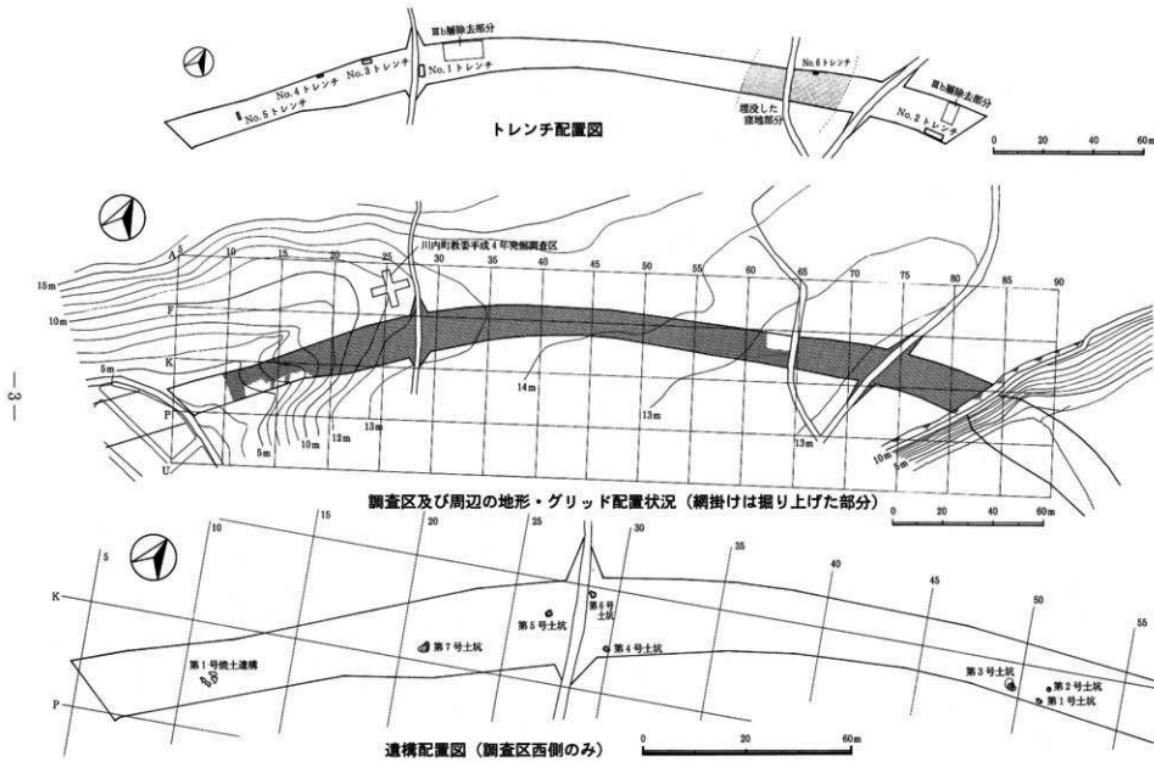


図2 調査区と周辺の地形・グリッド配置図、トレンチ配置図、遺構配置図

#### [調査の方法]

グリッド法を基本とした分層発掘とした。

遺構の精査は、必要に応じて適宜セクションベルトを設けて行い、20分の1の縮尺を原則とした簡易造り方測量で実測した。遺構の番号は種類ごとに付し、確認順あるいは調査着手順に命名した。

土層の名称は、基本層序については、表土から下位にローマ数字を付し、細分される上層はさらに小文字のアルファベットを附加した。遺構内の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層観察に当たっては、『新版標準土色帖』(小川正忠、竹原秀雄 1996) を用いて注記した。

写真撮影は適宜行うこととし、主としてカラーリバーサル及びモノクロームの2種類のフィルムを用いた。ただし、遺構や遺物の状況に応じてカラープリントやインスタンスカメラも使用した。

遺物の取り上げは、グリッド単位あるいは遺構ごとで層位毎に行い、必要に応じて平面図の作成、標高の記録を行うこととした。

### 第3節 調査の経過

4月中旬に調査区内に散乱する杉の枝葉の除去と一部の表土剥ぎを行い、調査に備える。

4月22日（火）、小雨の降る中調査器材を搬入し、環境整備を行った。

表土を除去し終えていた30ライン以東の平場は、調査開始とともに遺構確認を行い、グリッド設定やベンチマークの設定を行う。4月下旬には平場の遺構確認と併行して西側斜面の遺物の包含状況を把握するため、トレンチを設定して粗掘りを進める。

5月上旬、調査区東側3分の1ほどの面積をもつ平場では遺物がほとんど出土しないものの、西側斜面ではやや密な状態で出土することが確認された。

5月14日（水）、第二川内小学校児童7名が大島教諭と共に戸沢遺跡の見学に訪れ、社会学習を行った。遺跡見学の後、出土していた土器を一部水洗いし、土器の多様さを学んだ。

5月15日（木）、西端で焼土を検出し精査を行う。これ以後、30ライン東側の平場と、調査区西側の斜面部分に重点を置いて調査を進める。しかし、湧水点となっている西側斜面は、降雨が続いて水が湧き続き、調査は難航する。5月26日（月）以降、職員2名・調査補助員1名の3名体制に規模を縮小して調査を継続することとなった。

6月に入り、数基検出された土坑精査に加えて、部分的に第III b層を掘り上げ、無遺物層であることを確認した。

6月12日（水）、調査器材の搬出・洗浄、片付け及びプレハブ・トイレの撤去を行い、期間を短縮して調査を終了した。なお18日（火）には、借地に仮置きしていた排土や碎石を調査区内に運搬した。

### 第4節 遺跡周辺の地形と基本層序

本遺跡は、斧の形状をなす下北半島の南側にあり、陸奥湾北岸のはば中央部に位置する。川内町の東端でむつ市との境界にあたる戸沢地区にある。30ライン以東の調査区域の東側3分の1は、標高12～14mの海岸段丘上に位置しており、東端は比高差9mの急崖となって、陸奥湾まで200m続く沖積地へ降りていく。30ライン以西の調査区西側3分の1は、この段丘面から戸沢川へ向かう谷地形部分で、傾斜地となっている。戸沢川を挟んだ対岸の段丘上、本遺跡から西方600mの地点には、平成6



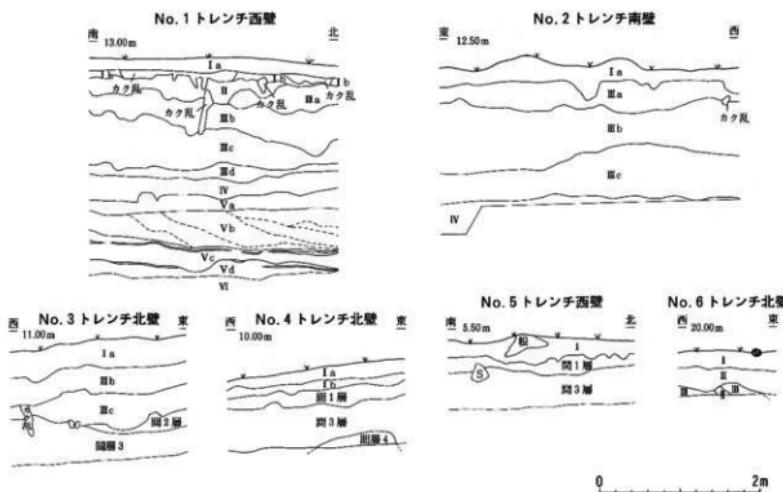


図3 基本層序

段丘上の当該土層が沢地形へ流れ込んだものと思われる。

**間2層 明褐色粗粒砂 (7.5YR5/8)** III層の粘土質ロームが少量混入する粗粒砂で、流れ込みと思われる。No.3 トレンチにのみ確認された。

**間3層 黄褐色土 (10YR5/8)** III層ローム土を主体としており、それに数～10cm大の角礫・円礫がやや多量気味に混入している。安山岩や凝灰岩を含む恐山の火砕流堆積物と思われるが、海岸段丘上の基本層序中にはみられないことから、沢地形部分にみられる間層として扱った。No.5 トレンチでは、湧水の影響から、グレイ化し、粘土質となっている。

**間4層 明褐色土 (7.5YR5/8)** ロームと砂の混合土で、かなり堅くしまっている。数cm大の円礫が少量入っている。

遺物包含層は、I層、間1層である。しかし、間1層から縄文時代早期から晩期までの土器が混在して出土しており、層位的な出土状況はみられなかった。また、平場東側と西側の2カ所でトレンチを設定してIIIb層を掘り上げたが、遺物は出土しなかった。

## 第Ⅱ章 検出遺構と出土遺物

土坑7基、焼土遺構1基が検出された。土坑は調査区西側の平場から斜面にかけて散発的に分布し、焼土遺構は西端の斜面下、沖積地の際に位置している。

### 第1節 土坑

#### 第1号土坑(図4)

[位置・重複] 調査区中央部、G-46グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

[形態・規模] 平面形は東西に長い楕円形を呈し、長軸135m、短軸75cmの規模である。確認面からの深さは28cmである。

[底面・壁] 底面はやや凹凸があり、底面東側には開口部が36×28cmの楕円形で、深さ16cmの小ビットがある。東壁・南壁は、80°程の急な立ち上がりだが、西壁・北壁は30~40°の緩やかな立ち上がりである。

[堆積土] 堆積土は3層に分層されるが、草根の多いしまりのない暗褐色土を主体としている。人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の状況から、近代以後の可能性が高い。

#### 第2号土坑(図4)

[位置・重複] 調査区中央部、G-46グリッドに位置する。他遺構との重複はないが北側がトレンチャーによって一部壊されている。

[形態・規模] 平面形は長軸92cm、短軸88cmの不整な円形を呈し、確認面からの深さは28cmである。

[底面・壁] 底面はすり鉢状を呈しており、全体的に凹凸がある。壁は、30°程の傾斜で湾曲気味に立ち上がる。

[堆積土] 草根が多く、しまりのない黒褐色土が堆積している。人為堆積の可能性がある。

[出土遺物] なし。

[時期] 堆積土の状況から、近代以後の可能性が高い。

#### 第3号土坑(図4)

[位置・重複] 調査区中央部、G-44グリッドに位置する。他遺構との重複はないが、北西部と中央部がトレンチャーによって壊されている。

[形態・規模] 平面形は東西にやや長い不整形である。長軸はトレンチャーによって壊されているものの、250cm程になるものと思われ、短軸は168cmを測る。確認面からの深さは80cmである。

[底面・壁] 開口部に対してやや北東寄りの部分が柱穴状でもっとも深くなっているが、38×28cmの平らな底面となっている。底面の東側は70~85°程の急激な立ち上がりであるが、西半は開口部へ向かって35~45°程で緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 8層に分層され、褐色土と暗褐色土が覆土となっている。覆土上位は草根を多量に含んで

いる。人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕堆積土の状況から、近代以後の可能性が高い。

#### 第4号土坑（図4・6）

〔位置・重複〕調査区平坦面の西端、H-19グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

〔形態・規模〕平面形は北東-南西方向に長軸を持つ楕円形で、長軸188cm、短軸100cmの規模である。確認面からの深さは35~40cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。北東壁は80°のやや急な立ち上がりで、南西壁は底面から10cmほどの高さで傾斜が緩くなり、その後湾曲しながら立ち上がっていく。一方短軸方向では45~50°の緩やかな立ち上がりとなっている。

〔堆積土〕4層に分層される。上位には褐色土及び暗褐色土が堆積するが、主体となるのは明褐色土である。炭化物が極微量混入し、人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕覆土から石鐵が1点（図6-1）出土している。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代のものと思われるが、時期は特定できなかった。

#### 第5号土坑（図4）

〔位置・重複〕調査区平坦面の西端、G-26グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

〔形態・規模〕平面形は南北に若干長い楕円形で、北東部には30cmほどの突出している部分がある。長軸138cm、短軸116cmの規模で、確認面からの深さは28cmである。

〔底面・壁〕底面は平坦で、底面南側には直径25cm、深さ10cmの円形のピットがある。東壁は、ほぼ直角に立ち上がるものの、北壁・南壁は60~70°、西壁は40°で緩やかな立ち上がりである。

〔堆積土〕3層に分層され、褐色土が主体で中位は暗褐色土である。人為堆積の可能性がある。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕時代・時期は特定できなかった。

#### 第6号土坑（図5）

〔位置・重複〕調査区平坦面の西端、F-28グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

〔形態・規模〕平面形は東西に長い楕円形で、南東隅に40cmほどの半円状の張り出し部分がある。規模は、長軸147cm、短軸70cmであるが、張り出し部分では105cmである。確認面からの深さは26~34cmであるが、本来は40cm程だったものと考えられる。

〔底面・壁〕底面は平坦に整えられている。壁は、長軸方向である東西方向では湾曲しながら立ち上がるものの短軸である南北方向では65~80°で直線的に立ち上がっている。

〔堆積土〕褐色土主体の堆積土で3層に分層され、いずれも極微量の炭化物が混入している。人為堆積か自然堆積かは判然としない。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕時代・時期は特定できなかった。

### 第7号土坑（図5）

〔位置・重複〕 調査区西側斜面部中位、J-20・21グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

〔形態・規模〕 平面形は東壁が入り込む南北に長い不整形で、規模は長軸243cm、短軸168cmである。確認面からの深さは、西側に傾斜する斜面地に位置していることから西側がやや浅く25cm、東側がやや深く40cmとなっている。

〔底面・壁〕 底面は凹凸があり、平坦に整えられていない。北から東にかけての壁際には若干の平坦面があるが、ここも傾斜している。壁の立ち上がりは、底面からは50°前後のやや急な傾斜で立ち上がるものの、上部では10~20°の緩い立ち上がりとなっている。

〔堆積土〕 確認面では暗褐色土及び黒色土であるが、覆土の大半は褐色土が主体となっている。4層に分層され、人為堆積の可能性がある。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 時代・時期は特定できなかった。

### 第2節 焼土遺構

#### 第1号焼土遺構（図5・6）

〔位置・重複〕 調査区西側斜面下部、M-10・11グリッドに位置する。焼土と暗褐色土の混合土が検出された。また、本遺構の北側に炭化物を多量に含む黒褐色土が広がっており、焼土遺構の一部と思われる。

〔形態・規模〕 焼土部分は東西に長い不整な楕円形に広がっており、東西258cm、南北105cmの規模で、確認面からの深さは27cmである。炭化物の散布部分は北西-南東方向に長軸を持ち、長軸323cm、短軸154cmの範囲で、炭化物を含む黒褐色土層が12cmほど堆積している。しかし、明確な掘り込みが確認できないことから、当時の生活面に散布しているものと考えられる。

〔底面・壁〕 焼土掘り方の底面はやや凹凸がある。斜面上方にある北壁では50°ほどの明確な立ち上がりがあるが、斜面下方にある東・西・南側では判然としていない。

〔堆積土〕 焼土部分は、覆土上・中位に焼土を多量に含む暗褐色土を主体としている。炭化物散布部分は黒褐色土である。側立で出土した石皿の掘り方は炭化物・焼土を含む褐色土である。

〔出土遺物〕 焼土部分の東端には、3片に破碎された石皿（図6-2）が立った状態で並べられて出土している。

〔時期〕 本遺構の周辺は、表上が薄く、杉の根による攪乱があることや、明確に遺構に伴う上器が出土していないことから、遺構の時期を特定することはできなかった。しかし、放射性炭素年代測定によるとA.D. 100年という結果が出ており、弥生時代の可能性がある。

## 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1998年3月17日

青森県埋蔵文化財調査センター 殿

1997年12月12日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告いたします。

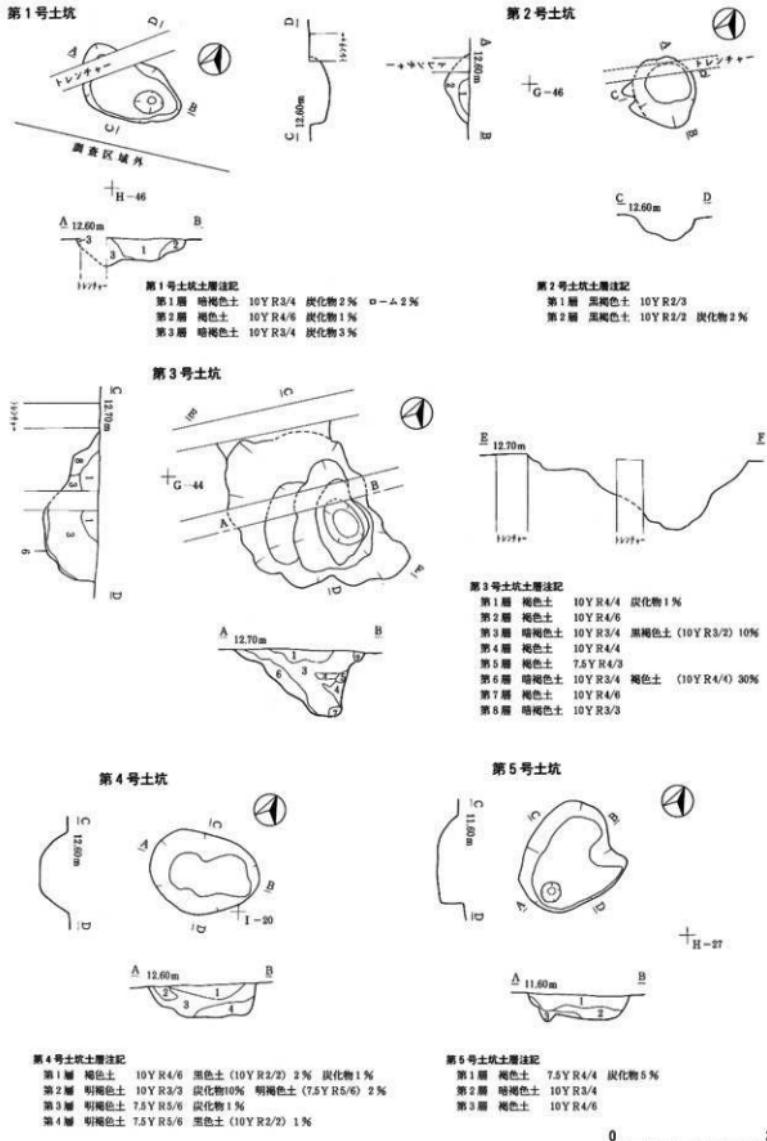
なお年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示しております。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記しております。

### 記

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
G a K-19875	炭化材 from 戸沢遺跡	1850 ± 70
	No.1 焼土確認面より - 5 cm	A. D. 100

以上

木越邦彦



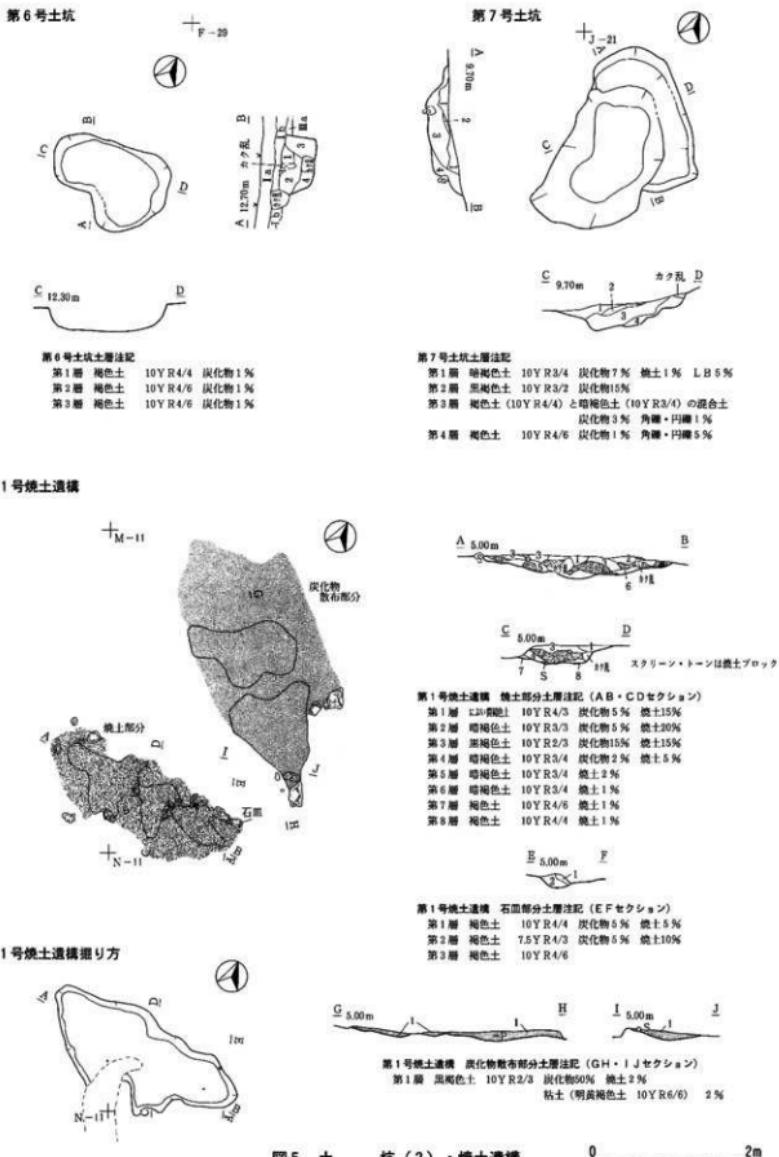


図5 土坑(2)・焼土遺構

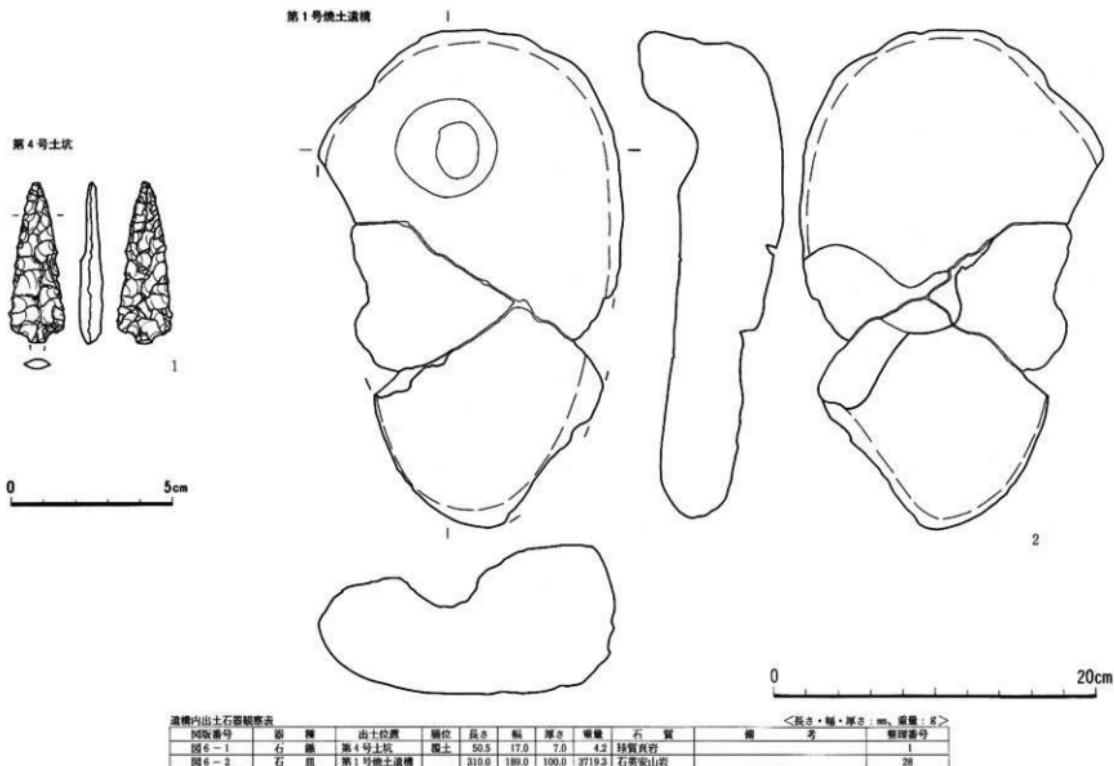


図6 遺構内出土遺物

### 第3節 遺構外の出土遺物

遺構外からは、陶磁器類と若干の土器片が30ライン以東の平場から散発的に出土したが、大半の遺物は西側斜面から出土した。時期的には縄文時代早期・前期・中期・後期・晚期・弥生時代のものがあり、後期前半の遺物が段ボール箱4箱で最も多く、他の時期はいずれも少量で段ボール箱2箱ほどである。

#### (1) 土器(図7-3~図11-54)

3~9は縄文時代早期のものと思われる。3~6は同一個体の土器片で、器面に対して右斜方向から爪形状の刺突が工具によって施されている。3は口縁部、4は胴部、5・6は胴部下半の破片で丸底になるものと思われ、白浜式かその前後のものと考えられる。7・8も同一個体の土器片で、口縁は小波状口縁をなし、胴部には1条が1.5~2mm幅の太めの条痕が縦位に施されている。器形に屈曲はみられず、体部上半はほぼ垂直に立ち上がっている。口縁下1cmの外面には輪積痕が観察されるが、内面は平滑に整えられており輪積痕は観察されない。口唇部は指頭によって押圧が加えられ小波状を呈している。焼成は良好で植物纖維は混入されておらず、海綿骨針は極微量混入しているようである。縄文時代後期末~晚期にみられる条痕を持つ粗製土器の可能性もあるが、口唇の形状や施文具などから縄文時代早期のムシリI式土器もしくはその前段階の貝殻文土器の時期と考えられる。9は口縁に斜めの短沈線、口縁直下には横走沈線を施したもので、ムシリI式土器と思われる。

10~13・15・16は縄文時代前期のものである。10は縄文時代前期初頭の長七谷地Ⅲ群土器と考えられ、太い原体を用いた結束羽状縄文が横位施文されている。11~13・15・16は円筒下層式土器で、破片が小さいため断定はできないが、いずれもc式もしくはd式と考えられる。

14・17は縄文時代中期の土器である。14は磨滅して文様は不明であるが、隆帯があることから円筒上層a式土器と思われる。17は円筒上層b式土器で、撚り紐の馬蹄形圧痕が施文され、口縁には突起がある。また、突起の下部には粘土紐の剥落した痕跡がみられ、突起から下垂する粘土紐があったものと思われる。

18・19は縄文時代中期末葉のものと思われる土器である。18はヒレ状突起を持つ口縁部破片で、その下位には口縁に平行して粘土紐が貼り付けられている。19は下半が膨らむ深鉢と思われ、沈線施文後、R L縄文を施文している。

20~48は縄文時代後期前半の土器である。20~30は縄文時代後期初頭から前葉の上器である。21・22は同一個体と思われ、突起のある折り返し状口縁を持っている。23・24も折り返し状口縁である。25~30は沈線と縄文を組み合わせ、一部縄文を磨り消しているものもある。31~33は十腰内I式土器である。31・32は同一個体の波状口縁頂部で、太く深い沈線と深い竹管状の刺突で施文されている。33はやや小型の深鉢と思われる。34~42は縄文を主たる文様とするもので、41・42は折り返し状口縁となっている。34・35は地文縄文の他、撚糸圧痕文と円形の粘土を貼り付けている。原体は単節(34~36・41)のもの、無節のもの(37・38・42)、RとLをしに撚ったもの、格子目状撚糸文(単軸絡条体第5類)のもの(40)がある。43~48は縄文時代後期の土器底部で、底面に網代痕のみられるものがある(44・45・47・48)。

49~51は縄文時代晚期のものと思われる。49は深鉢胴部の破片で、0段多条のRLとLRで羽状縄

文を施している。50は深鉢胴部下半の破片で、51は台部の剥落した台付鉢の底部と考えられる。

52~54は弥生時代のものである。52は砂沢式土器の深鉢胴部片で、53・54は忿仏間式土器の鉢口縁部である。

#### (2) 陶磁器 (図11-55~57・観察表、写真図版7-58~70)

55~57は陶器で、58~70の陶磁器は写真図版に内外面を示した。

55は珠洲片口擂鉢と思われ、内面には5条以上ある櫛歯で鉗目が施されている。内傾する口縁には櫛歯波状文が施され、珠洲VI期と考えられる。56は擂鉢頸部付近の破片で、57は壺の可能性が高い陶器片であるが、いずれも時期及び産地は不明である。写真図版58・59の灰釉を施した陶器も、産地・時期とも不明である。

染付磁器は肥前IV期から現代のものまで出土したが、幕末頃以前のものを写真図版で掲載した。小破片のものや風化・摩滅の激しいものが多く、全体の器形・文様を知りうるものはほとんどないが、器種は碗・鉢・八角鉢があるようである。60~65が肥前IV期、66が肥前IV~V期、67・68が肥前V期、69・70は幕末~明治期のものと思われる。また、染付の内面もしくは外面に青磁釉を施すものが3点あり、65は内面に、66・67は外面に用いている。他の個々の文様・特徴等は観察表に記してある。

#### (3) 石器 (図12-68~図16-96)

71~77は石鎌である。73が黒曜石製である他は、すべて珪質頁岩製である。71~75は有茎石鎌で、71~73は基部先端が尖るもので、72は基部がやや細めのものである。76・77は無茎石鎌で、76は平基、77は凹基である。78・79は石錐で、78が全体的に扁平であるのに対して、79は刃部・柄部とも断面形が三角形をなしている。80は折損した縦型の石匙で、抉りは明瞭でない。82は折損した石箒で、刃部のみ遺存している。81・83~88は不定形石器で、81が搔器として、83・85は削器として用いられたものと思われる。83・86~88は同一の母岩から採取した剥片と思われ、83・88は刃部を作出しているが87・88には明瞭な刃部を作出せず、使用によって細かな剥離が発生したものと思われる。

89・90は石斧である。89は折損しているがやや大型の磨製石斧である。90も磨製石斧であるが、柄部を打ち欠き敲きを加えて再加工している。刃部は使用により摩耗している。

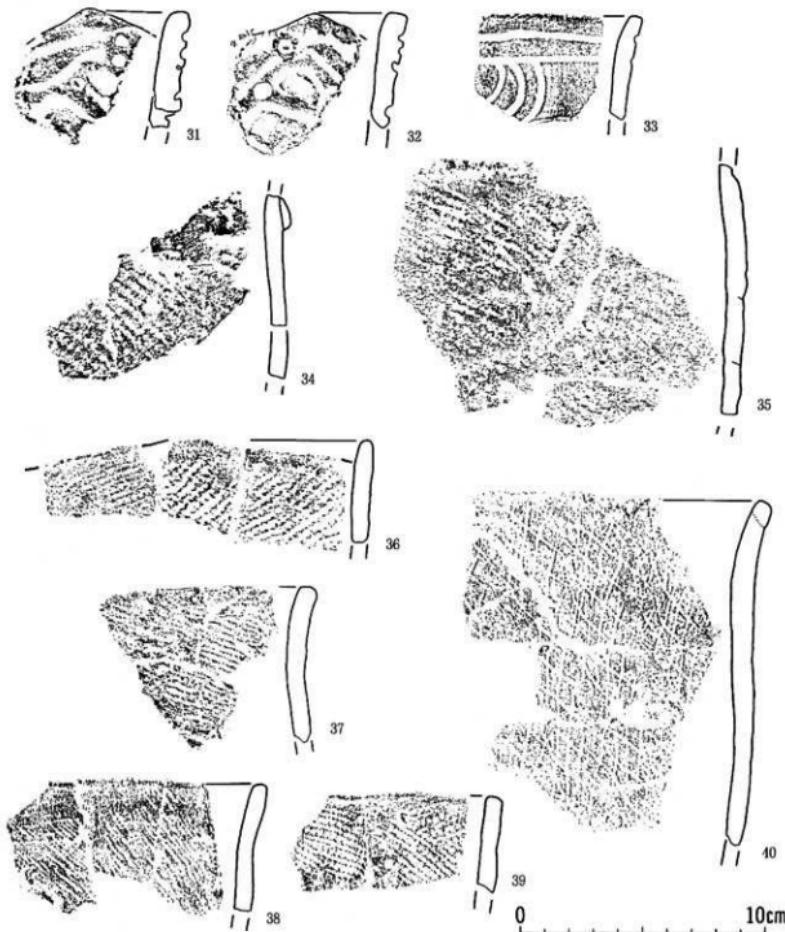
91は小礫の両端を打ち欠いており、石錐の可能性がある。

92~96は凹敲磨器の類である。92は、三辺に敲き或いは剥離を加え、片方の短辺中央部には抉りを入れて握りやすいように加工し、長辺の一側辺を磨り面として用いている。93は頁岩で、円礫の一端を敲き面として用いている。94は扁平な円礫の平坦面両面を凹面として使用している。被熱しているものと思われ、スス状のものが付着している。95も円礫を敲いており、凹んでいる。96はやや扁平な礫の一側辺を磨り面として用いている。

97・98は砥石で、97の裏面は自然面あるいは節理面となっている。98は長方形に面取りをして整形している砥石で、2片が接合したものである。98aの割れ口部分に、腹面・背面の両面から擦りを施しており、折損後も砥石として使用したものと思われる。

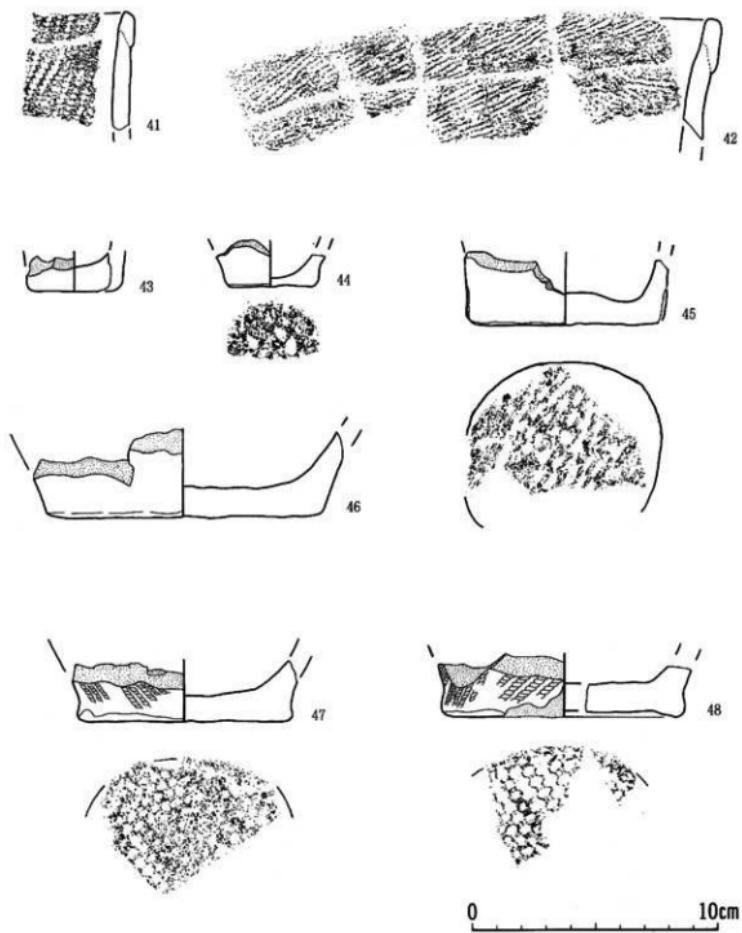






発掘位置番号	種類	部位	出土位置	断面	文様	備考	時代	期別	型番号
図9-31 織文土器	湯鉢	口縁部	K-15	I層	沈紋、竹青状斜突	波状口縁 32と同一側体	織文後期（十箇内I式）	50	
図9-32 織文土器	湯鉢	口縁部	J-22	間1層	沈紋、竹青状斜突	波状口縁 31と同一側体	織文後期（十箇内I式）	51	
図9-33 織文土器	小判形鉢	口縁部	K-18	間1層	沈紋		織文後期（十箇内I式）	52	
図9-34 織文土器	湯鉢	網部	M-11	間1層	L.R構文、L.R直筋、突起	35と同一側体	織文後期前半	53	
図9-35 織文土器	湯鉢	網部	M-11	I層	L.R構文、L.R直筋	34と同一側体	織文後期前半	54	
図9-36 織文土器	湯鉢	口縁部	L-14,K-17-18	間1層、I層	L.R構文	波状口縫	織文後期前半	55	
図9-37 織文土器	湯鉢	口縁部	J-17	間1層	L構文		織文後期前半	56	
図9-38 織文土器	湯鉢	口縁部	J-17+18	間1層	L構文		織文後期前半	57	
図9-39 織文土器	湯鉢	口縁部	K-16	I層	RとTを少しに施したもの		織文後期前半	58	
図9-40 織文土器	湯鉢	体部上半	J-18	間1層	格子状斜文（単輪底名体第1形）		織文後期前半	59	

図9 遺構外出土土器(3)



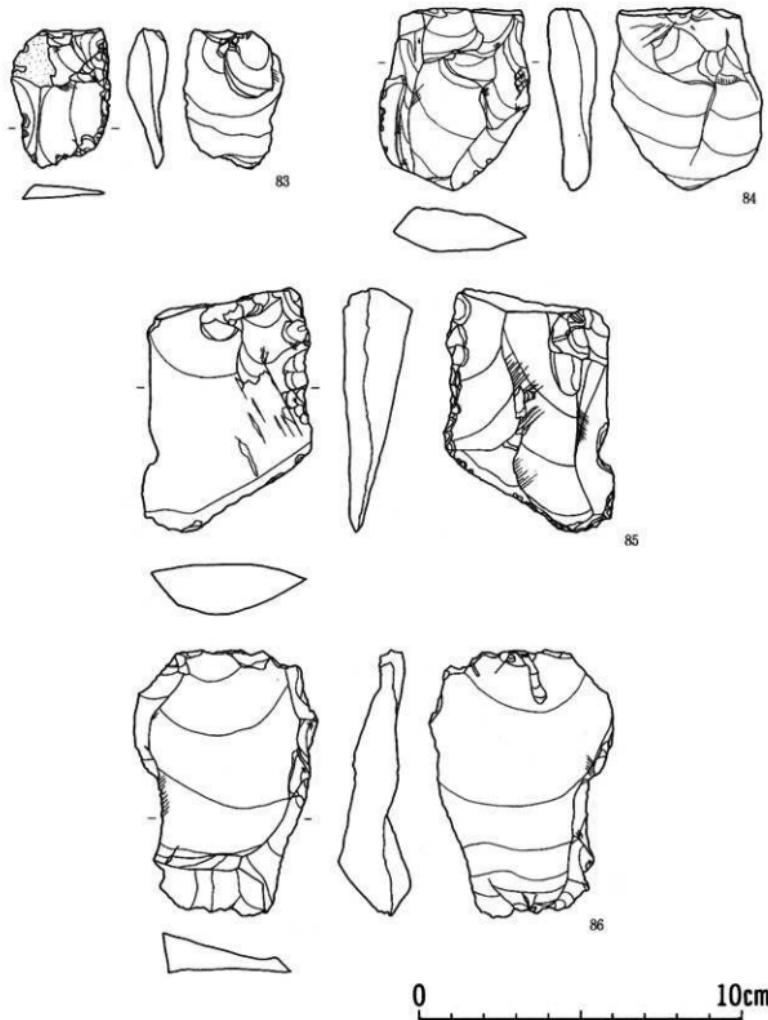
遺構外出土土器表

遺物番号	種類	岩種	部位	出土位置	層位	文 様	備 考	時 期	整理番号
図10-41	縄文土器	深鉢	口縁部	L-18	間1層	R.L縄文	折り返し状口縁	縄文後期前半	58
図10-42	縄文土器	深鉢	口縁部	K-15・16	I層	L縄文	折り返し状口縁	縄文後期(十腰内I式)	55
図10-43	縄文土器	深鉢	底部	N-9	間1層	(無文)		縄文後期前半	11
図10-44	縄文土器	深鉢	底部	L-13	I層	(無文)		縄文後期前半	70
図10-45	縄文土器	深鉢	底部	M-10	I層	(摩滅のため不明)	新代底?	縄文後期前半	71
図10-46	縄文土器	深鉢	底部	K・L-16	I層	(無文)		縄文後期前半	67
図10-47	縄文土器	深鉢	底部	K-14	I層	R.L縄文?	新代底	縄文後期前半	68
図10-48	縄文土器	深鉢	底部	J-19, L-18	I層,間1層	R.L縄文	新代底	縄文後期前半	69

図10 遺構外出土土器(4)

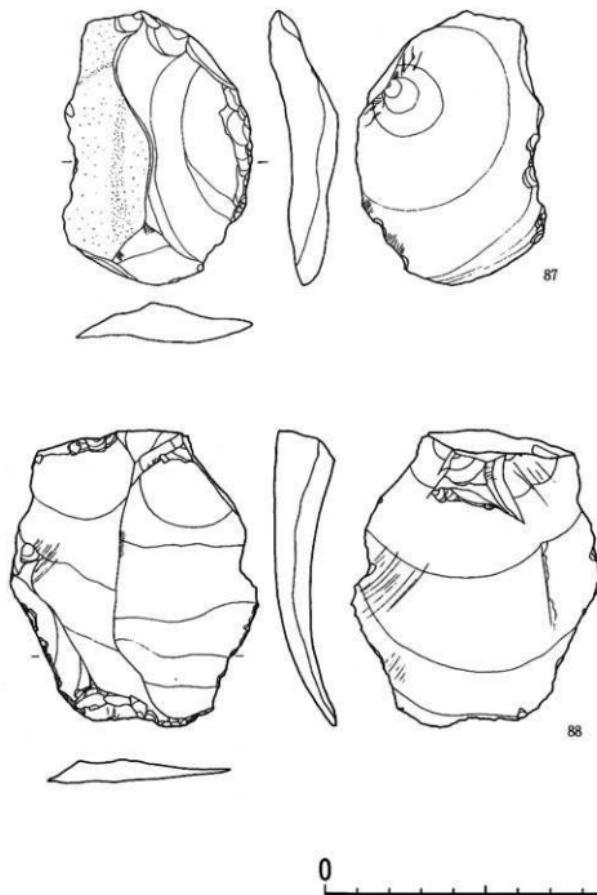






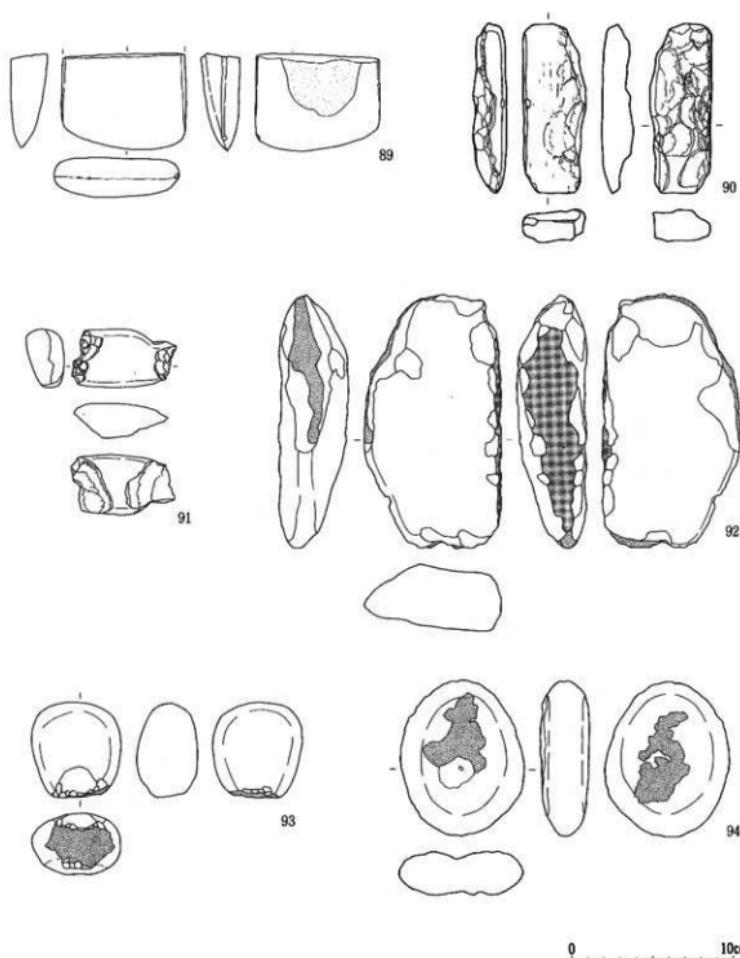
<長さ・幅・厚さ: mm、重量: g>										
図版番号	器種	出土位置	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考	整理番号
図13-83	不定形石器	L-15	I層	43.5	31.5	12.5	10.8	珪質頁岩	剝離	13
図13-84	不定形石器	L-15	I層	56.5	41.5	15.0	32.6	珪質頁岩		14
図13-85	不定形石器	K-17、18	I層	76.5	53.0	21.0	63.4	珪質	剝離	15
図13-86	不定形石器	K-15	陶I層	62.5	57.0	22.5	50.2	珪質頁岩		16

図13 造構外出土石器（2）



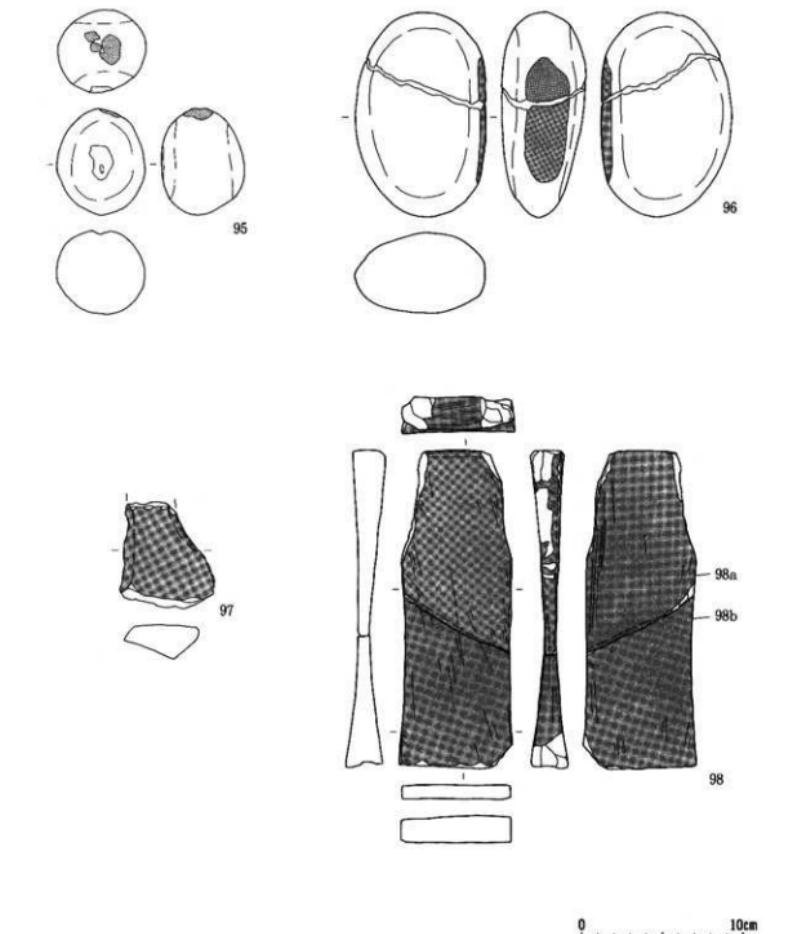
<長さ・幅・厚さ: mm、重量: g>											
器種番号	器	形	出土位置	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石質	器 番 号	整理番号
図14-87	不定形石器	長-16	面1面	85.5	59.0	15.0	58.1	珪質頁岩		17	
図14-88	不定形石器	長-16	面1面	92.0	77.5	19.0	83.2	珪質頁岩		18	

図14 遺構外出土石器（3）



遺物番号	名	種	出土位置	層位	<長さ・幅・厚さ: mm. 重量: g>			備考	整理番号	
					長	幅	厚			
図15-89	磨製石斧	棒上			60.5	78.0	34.0	180.8 緑色細粒凝灰岩	折目	31
図15-90	磨製石斧	K-15	I層	105.5	58.5	39.5	145.4 緑色細粒凝灰岩		22	
図15-91	石 破?	L-19	I層	65.5	36.0	33.0	60.5 真岩		30	
図15-92	磨・敲石	K-17	間1層	158.0	85.0	42.0	696.8 安山岩		27	
図15-93	敲 石	J-19	間1層	59.0	55.5	37.5	178.6 真岩		23	
図15-94	凹・敲石	L-20	I層	94.0	78.0	38.0	246.8 安山岩	被施?	25	

図15 遺構外出土石器(4)



遺構外出土石器観察表

図版番号	器種	出土位置	層位	<長さ・幅・厚さ: mm. 重量: g>				備考	整理番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
図16-95	圓・敲石	L-19	I層	66.0	55.0	51.0	190.5	石英安山岩	34
図16-96	磨・石	K-19	間1層	127.0	61.0	52.0	610.0	石英安山岩	26
図16-97	敲・石	L-20	I層	66.0	59.0	29.5	98.7	輝斜岩	29
図16-98a	敲・石	L-17	I層	127.0	68.0	20.0	186.2	輝灰岩	31
図16-98b	敲・石	K-18	I層	105.0	71.0	26.0	185.9	輝灰岩	30

図16 遺構外出土石器(5)

### 第三章 まとめ

本遺跡は、下北半島の南側にあり、陸奥湾北岸のほぼ中央部に位置する。調査区は、海岸段丘上にある平場部分と、本遺跡の西を南流する戸沢川へ降りていく谷地形部分である。標高は、海岸段丘上が標高12~14mで、調査区西端の谷地形にある西側斜面部分は4~12mである。

検出された遺構は、土坑7基、焼土遺構1基であった。第4号土坑から石鐵1点、第1号焼土遺構から石皿が出土したほかは遺物が出土せず、いずれの遺構も時代・時期を明確に特定できなかった。

遺物は、ダンボール箱で7箱出土したにすぎない。平場は削平されている可能性があることから特に出土量が少なく、陶磁器と極少量の土器・石器がダンボール箱1箱程度である。多くの遺物は西側斜面からの出土であったが、表土から確認面まで浅いことや谷地形で土砂の流入が頻繁なことから層位的に出土しなかった。

出土した遺物は、縄文時代早期（爪形の施文される土器・条痕文土器・ムシリI式土器）・前期（長七谷地Ⅲ群土器、円筒下層c・d式土器）・中期（円筒上層a・b式土器、中期末葉）・後期前半・晚期・弥生時代前期・後期・中世（15世紀後半）、近世（18世紀以降）のものがある。量的には縄文時代後期前半の遺物が卓越しており、全体の7割ほどと思われる。石器は石鐵・石錐・石匙・石籠・不定形石器（搔器・削器・フレーク）・磨製石斧・石錘・敲磨器類・砥石が出土した。

本遺跡は、多時期にわたる遺物が出土するもののその総量は少なく、遺構も極少数であることから、縄文時代あるいは弥生時代に本遺跡で集落が営まれていた可能性は非常に低いものと思われる。しかし石皿が立った状態で出土し、焼土範囲と炭化物の範囲が分離して検出された第1号焼土遺構が見つかったことから、一時的な駐留地として本遺跡が該期において生活の場の一部であったことが伺い知れる。

また、中世の遺物が1点出土しているが、中世には本遺跡の西方6kmの地点に陶磁器を多量に出土した鞍越遺跡があることから、何らかの関連があるものと思われる。

#### ＜参考文献＞

- 青森県教育委員会 1989 『表館（1）遺跡III』県埋文報第120集
- 青森県教育委員会 1996 『戸沢川代遺跡』県埋文報第192集
- 加藤晋平・鶴九俊明 1980 『図録 石器の基礎知識 I -先土器（上）』
- 川内町教育委員会 1991 『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』
- 川内町教育委員会 1993 『川内町埋蔵文化財発掘調査報告書』「戸沢（1）遺跡」
- 縄文文化検討会 1989 『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』
- 村越 澤 1984 『円筒土器文化』雄山閣考古学選書10



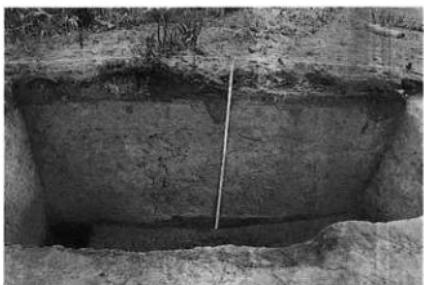
遺跡遠景 (S→)



戸沢川代遺跡より戸沢遺跡を望む (W→)



基本層序 (No. 1 トレンチ、E→)



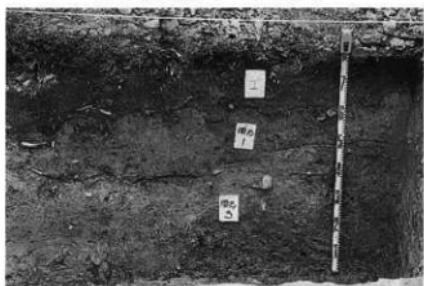
基本層序 (No. 2 トレンチ、NW→)



基本層序 (No. 3 トレンチ、S→)



基本層序 (No. 4 トレンチ、S→)



基本層序 (No. 5 トレンチ、E→)



基本層序 (No. 6 トレンチ、S→)

写真図版 1 遺跡遠景、基本層序



第1号土坑セクション（SW→）



第1号土坑完掘（NW→）



第2号土坑セクション（SW→）



第2号土坑完掘（SW→）



第3号土坑ABセクション（N→）



第3号土坑完掘（NW→）

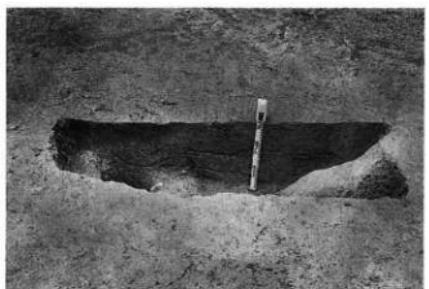


第4号土坑セクション、石礫出土状況（S→）



第4号土坑完掘、石礫出土状況（S→）

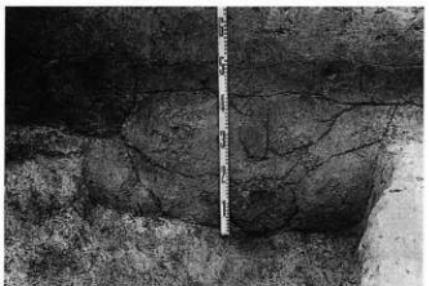
写真図版2 土 坑（1）



第5号土坑セクション（S E→）



第5号土坑完掘（NW→）



第6号土坑セクション（E→）



第6号土坑完掘（E→）



第7号土坑ABセクション（W→）



第7号土坑CDセクション（N→）



第7号土坑完掘（N→）

写真図版3 土 坑 (2)



第1号焼土造構検出状況 (S E→)



第1号焼土造構焼土範囲 (N→)



第1号焼土造構石皿部分セクション (W→)



第1号焼土造構炭化物散布部分検出 (N→)



第二川内小学校遺跡見学



西側斜面部分調査風景 (E→、5月7日)



L-13グリッド付近 遺物出土状況 (N→)



西側斜面部分調査風景 (E→)



平場東端完掘 (W→)



I-82グリッド付近第III b層除去状況 (SW→)



平場座地部分完掘 (E→)



平場西側完掘 (W→)

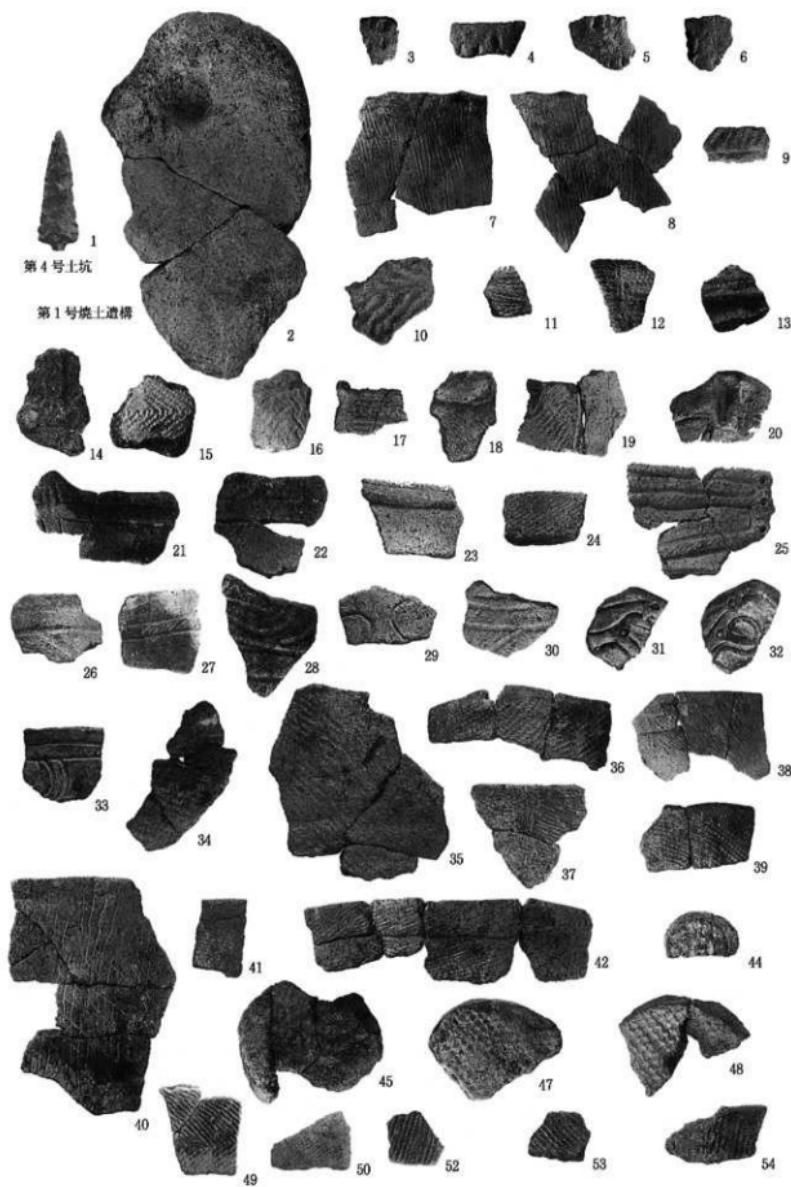


F-33グリッド付近第III b層除去状況 (S→)

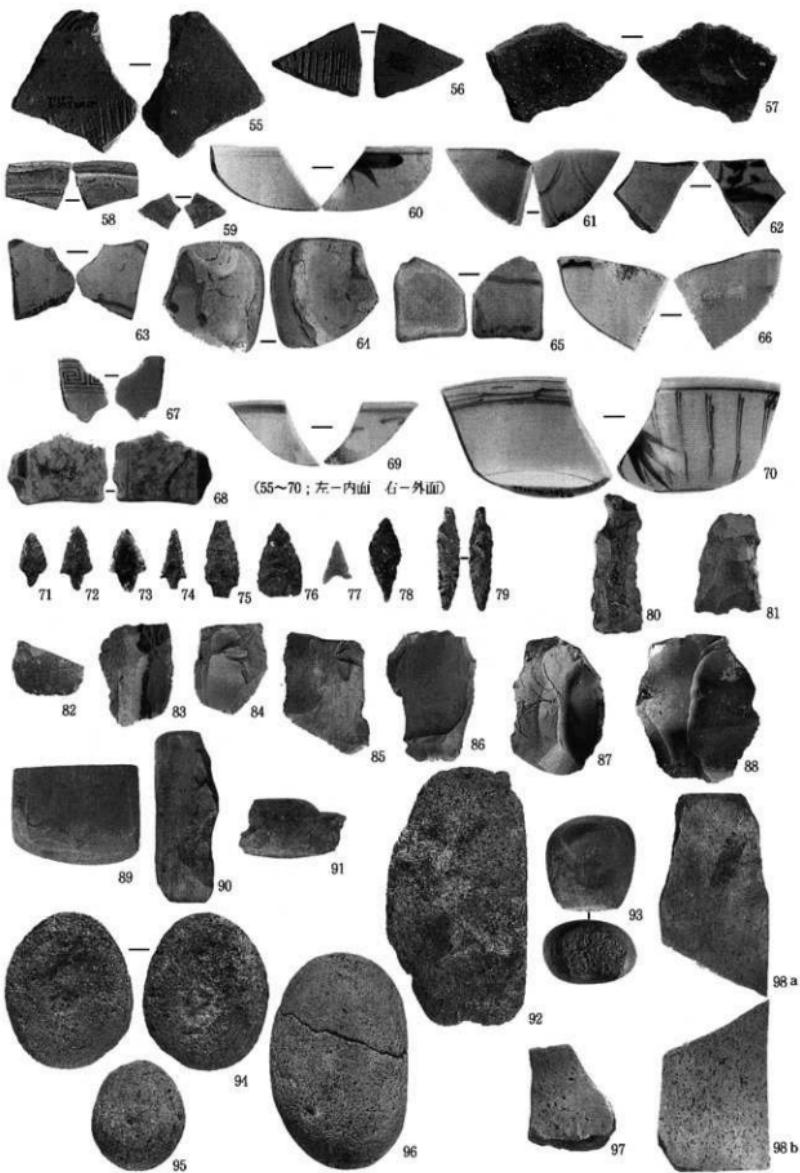


西側斜面部分完掘 (W→)

写真図版 5 調査区完掘



写真図版 6 遺構内出土遺物・遺構外出土土器



写真図版 7 遺構外出土陶磁器・石器



---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第254集

## 戸 沢 遺 跡

—県営高野川地区農免農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 1999年（平成11年）3月19日

発 行 青森県教育委員会

〒030-0801 青森市新町2丁目3番1号

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL(0177)88-5701 FAX(0177)88-5702

印 刷 東奥印刷株式会社

TEL0177(76)5361 FAX0177(76)5363

---



